

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (教育学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	曾 琴
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) CLIL 指導による異文化間能力と口頭産出能力の変化とその要因 —中国における「日本事情」科目を対象に—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教 授	畑 佐 由紀子	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教 授	柴 田 美 紀	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	准教授	中 山 亜紀子	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教 授	渡 部 倫 子	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、中国の大学で一般的に開講されている「日本事情」という科目を、言語と内容の融合を図る有力な教育的アプローチとされる内容言語統合型学習 (Content and Language Integrated Learning: CLIL) を理論的な枠組みとし、再設計し、実践を行い、効果を検証した。その際、以下の研究課題のもと、異文化能力と口頭産出能力に焦点を当てて検討した。</p> <p>課題1：学習者の異文化間能力は CLIL 授業を通して向上するか。 CLIL 授業群 (実験群) は知識伝達型授業を受けた統制群と比べ、異文化間能力の5つの要素全てにおいて、統制群よりも有意に向上するという仮説を立てた。</p> <p>課題2：学習者の口頭産出能力は CLIL 授業を通して向上するか。 CLIL 授業では学習者同士及び学習者と教師のやり取りが促進される。そのため、実験群は、講義中心の統制群よりも口頭産出能力が有意に向上し、学習者自身もそのことを自覚するという仮説を設定する。</p> <p>課題3：課題1と課題2の結果をふまえ、実験群と統制群の学習者の質的データを基に、個々の授業活動がどのように観察された変化につながったか、あるいは、つながらなかったかについて検討する。</p> <p>本論文は、全7章で構成されている。</p> <p>第1章では、本研究の背景と目的について論じた。</p> <p>第2章では、「日本事情」科目の現状及び、CLIL が異文化間能力と口頭産出能力に与える影響に関する先行研究について概観した。また、以上の先行研究から残された課題を整理し、本研究での課題を導いた。</p>			

第3章では、本研究の課題を解決するための調査の概要について述べた。実験群と統制群を設定し、12週間の授業実践の前後、及び実践中に、アンケート、自己評価、振り返り音声、作文データなど多様なデータを収集し、量的、質的に分析した。

第4章では、異文化間能力の5要素の変化について、アンケート、作文及びインタビューを通じて得られたデータを用いて検証を行った。その結果、実験群は統制群よりも、異文化間能力が有意に向上していた。また、作文及びインタビューデータから、CLIL指導による効果を質的に確認することもできた。

第5章では、口頭産出能力の変化について、産出量、CAF指標、及び学習者による自己評価の3側面から検証した。産出量においては、実験群の方が統制群よりも多く産出するという仮説が支持された。また、CAF指標においては、構文的複雑さで、実験群は統制群よりも、時間経過とともに指標の数値が向上していた。最後に、学習者の自己評価データから、実験群が統制群よりも有意に高い自己評価をしていることが分かった。

第6章では、異文化間能力と口頭産出能力の変化をもたらした要因について、学習者から得られた振り返り音声、作文、及びインタビューデータを用いて質的な分析を行った。その結果、CLILに基づく行身体験の共有、比較、分析、評価といった高次の思考が伴うインタラクション活動とそれらに伴う豊富な日本語の産出機会の提供が、学習者の異文化間能力及び口頭産出能力の向上に寄与していたことがわかった。

第7章では本研究のまとめ、教育的示唆、本研究の意義及び今後の課題について述べた。本研究は、中国の既存のカリキュラムにCLILという教育アプローチを導入することで、コンテンツのみならず言語の向上を図ることができることを示した。また、中国の大学の日本語教育において、異文化間コミュニケーション能力の育成を目指す際に、CLILが有用なアプローチとなり得ることを示唆できた。

本論文は次の3点で高く評価できる。

1. 欧州に比べ異文化間交流の機会が限られる中国の日本語教育環境でもCLIL授業が効果をもたらすことを証明した。
2. CLILが外国語環境で口頭産出能力の向上に役立つことを証明した初めての研究である。
3. 文法重視の中国の日本語教育に、新たな教授業を導入することの意義を主張できた。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 5年 2月 8日

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)